

令和6年度 県立友部東特別支援学校 自己評価表

<p>目指す学校像</p>	<p>○ 心からにやさしく寄り添う学校 ○ 「夢や希望」に向かって自分らしく成長できる学校 ○ 信頼とつながりを大切に作る学校</p>		
<p>昨年度の成果と課題</p>	<p>重点項目</p>	<p>重点目標</p>	<p>達成状況</p>
<p>○生徒の課題に合う職場見学や体験を行うことができ、自分の適性や得意・不得意を考えるきっかけにもなり、経験自体が少ない生徒たちにとって視野を広げる機会にもなった。 ●中学部段階の計画的な進路指導や本人・保護者との進路相談の進め方を整理していき、主体的に自己の進路を選択・決定できる能力を高めていきたい。 ○職場体験、体験実習、(デュアル型、連続型)現場実習等の就労体験学習を、生徒に合わせて実施することができた。 ●高等部では進路先等の情報提供や実習評価票を利用し、個に応じた進路指導の充実を図る。 ○学校間交流では、交流相手校の理解も深まり、生徒同士の自然な交流が見られた。訪問学級においても病院間の交流の他、全国の院内学級の児童生徒ともつながることができた。 ●交流内容や方法については、前年度踏襲ではなく生徒の実態を踏まえて計画を立てていく必要がある。</p>	<p>自立と社会参加に向けたキャリア教育の充実</p>	<p>①基本的な生活習慣と豊かな心の育成 ②切れ目のない支援と、系統的なキャリア教育の推進 ③進路選択を促す体験的な学習の充実及び個に応じた適切な進路指導 ④地域との交流や地域の教育力・資源等を活用した教育活動への展開(コミュニティ・スクール)</p>	<p>B</p>
<p>○生徒の学習の困難さや学習進度等について、部内で各授業での配慮や支援方法について確認することで、生徒の学習意欲の向上につながった。授業の振り返りを発表や掲示等で発信する機会を設けることで、他者にも関心をもったり、承認をしたりする姿が増えた。 ○ICTの活用や少人数教育という利点を生かし、体調や対人関係等に不安の大きい児童生徒であっても一人一人に合わせた学びの支援を行うことができた。 ●ICT活用における外部講師による指導の対象学年を広げていくことで、継続的な発信力や情報リテラシーの実際につなげたい。 ○転入時にCo-MaMe等のアセスメントを活用して実態把握と共通理解を図ることができた。 ●教科指導において各部の連携をとることが難しい教科もあった。次年度以降、教科会を活用し、よりよい授業づくりにつなげる必要がある。</p>	<p>一人一人の個性や特性及び状態に応じた指導・支援の充実</p>	<p>⑤子どもの気持ちの理解と、学習空白に対応した適切な指導・支援 ⑥教育的ニーズに応じた柔軟な対応と分かる授業の実践 ⑦自立活動の指導内容を意識した教科指導の充実 ⑧各授業におけるICTの有効的な活用</p>	<p>A</p>
<p>○病弱教育の専門性、資質向上のために専門家派遣事業を利用した研修会、各部の研修を実施することができた。 ●各部のニーズに応じた効果的で効率的な研修の在り方について考え、実施する必要がある。(指研) ●児童生徒の増加による学習形態の工夫、さらなる臨機応変な対応が必要な病院がある。</p>	<p>病弱教育の専門性の向上</p>	<p>⑨確かな専門性を踏まえた一人一人に寄り添う支援 ⑩校内研修等の充実による、専門性の向上 ⑪医療・福祉等、関係機関との連携・協働を通じた、支援の充実(学校病院連絡会・復学支援会議・校内教育支援会議等)</p>	<p>A</p>

<p>○本校ホームページへのコラム掲載・巡回相談のちらい配付で県内市町村に向けた情報発信ができた。また、笠間市コーディネーター連絡会議を実施し、本校と高等学校で相互授業参観を行うことができた。</p> <p>●近隣の学校教員に向けて本校の概要、支援体制の周知に努める。高等部の入試に関して、本校ホームページに学校見学、教育相談(2回)の実施の目安を掲載する。</p> <p>○高等部教育相談では、本校の教育対象や現状のシステムについて説明するとともに、多様な学びの場があることについても確認してきた。また、受検対象者本人の意思が大事であることを在籍校担当者へ繰り返し説明することで、本校の理解啓発だけでなく進路指導の意識向上につなげることができた。</p> <p>●入学選考にかかる相談であっても本校について情報のない先生方もいたため、コーディネーターと連携し本校を知っていただく機会を設定していきたい。</p>	<p>センター的機能の充実</p>	<p>⑫県内唯一の病弱特別支援学校として、組織的な支援を推進 ⑬教育相談及び入試相談の充実 ⑭病弱教育の積極的な発信 ⑮個別の教育支援計画及び個別の指導計画作成と活用の支援</p>	<p>A</p>
<p>○学級で生徒に個別に話を聞く時間を設けて、不安を打ち明けたり、気持ちの整理をしたりして、授業や活動に参加することができた。</p> <p>○授業中のクールダウンや休み時間の交流の場として多目的室を設定し、活用することができた。</p> <p>●クールダウンするための別室の使用については、生徒と使用の仕方を再確認する必要がある。</p> <p>○不安・悩みに関するアンケート及び聞き取り調査を学期に1回実施し、児童生徒の様子や変化を読み取り、いじめの未然防止に努めた。</p> <p>●いじめの定義の周知徹底することや本校で起きたいじめの重大事態について風化させないように、子どもの人権支援会議の目的については周知徹底していきたい。</p> <p>○各病院のマニュアルのもと、病院の避難訓練に参加することができた。</p> <p>○感染症情報システムを利用し、推移を見極めながら、感染防止対策について教職員や生徒への周知徹底を図ることができた。</p> <p>○様々な訓練や研修を行う中で、適宜校内体制の見直しと再構築を図り、危機管理マニュアルを改善してきた。</p>	<p>安全・安心な学校づくり</p>	<p>⑯心の居場所となる安心して学べる学校づくり ⑰いじめの予防的取り組みと組織的対応の充実 ⑱感染症等対策の徹底 ⑲危機管理マニュアル等の評価・見直し・改善</p>	<p>A</p>